

授 業 科 目 の 概 要				
(教育学部学校教育学科等)				
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
導 入 科 目	地域社会と大学教育	本講義は、初年次教育の意味合いを持たせている。大学のミッション、大学・学部・学科の3ポリシーについて確認する。大学生の特徴を捉えた教育手法を説明し、課題解決型の学びを展開しようとしていること、学生支援についての大学側の考え方がCSの向上にあるのではなく学生をパートナーと見なすというパラダイムシフトを考えていることを説明する。各種センターの機能について説明し、それらを大学生活の中で活かせるようにする。		
	知の技法	読み・書き・聞き・話すという4つの基本的技能について、基礎から学び直すことを通して、「知の技法」を身につけることを目標とする。具体的には、課題図書を読み要約を書くこと(読み書き)、課題図書の内容について小グループでディベートをすること(聞き話す)を半期に数回繰り返し、4つの技能のトレーニングを行なう。 ①一冊の本を決められた期間内に読めるようになること ②本の内容を1パラグラフで要約できるようになること ③ディベートで相手の主張を正しく聞きとれるようになること ④ディベートで自分の意見を決められた時間内に話せるようになること		
	基礎ゼミナールⅠ	入学1年目の大学生活をスムーズに行うために、学修方法、時間管理、大学施設・組織の活用方法など、大学生として当然身に付けなければならないライフスキルおよびアカデミックスキルの基礎を学ぶ。講義・ディベート・講演・演習など多様な形態により学修を展開していくことで、それ自体が大学における学び方であり、本ゼミナールを通して「高校までとは学びの質や方法などがどう違うのか」という観点から、自ら学ぶ姿勢を身に付け、自分の将来像を明確に描けるようにする。		
	基礎ゼミナールⅡ	基礎ゼミナールⅠの内容をさらに発展・深化させるため、場面設定をしてより具体的・実践的に学修を進めていくために、アクティブな学修活動を展開する。ライフスキルのコミュニケーション活動の実践場面として、大学の行事に絡めて活動を推進したり、アカデミックスキルを発揮する場としてグループ研究に取り組んでいく。また、2年生から始まる専門的なゼミナールの基礎として、教育の専門性について、各専門分野ごとに概要や実践例について学んでいく。		
コ モ ン ペ イ シ ッ ク ス	外 国 語 科 目 群	総合英語Ⅰ	実際に使える英語を習得し活用できるようになるために、基本的な英語でのリーディングやリスニング、スピーキングを行い英語でのコミュニケーションに慣れていく。英語でのアウトプットの前に十分なインプットを入れ、また同じ意味の様々な英語表現を聞いていく中で、基本的な文型や発話の仕方、コミュニケーションに慣れていく。またその理解の過程で慣れてきた英語表現等により、TOEIC®等の検定でよりよいスコアを目指せるような土台を築くようにする。	
		総合英語Ⅱ	総合英語Ⅰを受講した学生が基礎文法を応用し、TOEICレベルの英語を聞く・読む力を養うため、引き続きリスニング・スピーキング・リーディングを学修する。また実際にコミュニケーションをとることにより、その形式に慣れ、同時にインプットを増やしていく。リスニングの際に留意しておくべき音の変化や特徴を学び、それらを利用して聞き取れるよう取り組む。また総合英語Ⅰで学習した表現や文法を活用し、多くの英語を聞くことを通して、実践問題へとつなげていく。	
		総合英語Ⅲ	総合英語Ⅰ・Ⅱで学んだ基本の文法事項やリスニング力、スピーキング力を基に、さらにリーディング力の強化を中心に行う。簡単なニュース記事やインタビュー記事などを題材に英文の読解方法を学び、様々なトレーニングを通じて英文読解を確実に、かつ要点を速くつかむ練習を行っていく。	
		総合英語Ⅳ	これまで総合英語ⅠからⅢで学んできた英語の基礎力に加え、リーディング力の強化を中心に行っていく。簡単なメールや手紙の文例を基に英文の書き方や必要な語彙を学び、英語を書くことに慣れるようにする。後半では、自己紹介文や日記などを題材にさらに長い英文の書き方を学び、グループワークを通じて自ら改善、全体発表を行う。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
コモン ベイ シック クス	外国 語科 目群	英会話Ⅰ	このクラスでは、総合英語Ⅰで学ぶ基本的な文法項目と連動させながら、英語での会話に慣れることを目的に授業を進める。英語の4技能の中でもまずはスピーキングに特化し、英語を話す姿勢や大切にすべきことについて、アウトプットを通じて学びながら、ペアワークを通じて実践の中で英会話の基礎を身に付けていく。	
		英会話Ⅱ	英会話Ⅰで学んだ英会話の基礎をさらに応用し、総合英語Ⅰ・Ⅱで学ぶ文法項目と連動させながら、ペアワークを通じて、基本的なスピーキング力に加え、基本的なリスニング力の強化にも力を入れていく。相手の発話に応じた対応ができるようアウトプットを中心に練習を重ね、基本の英会話力を養う。	
		英会話Ⅲ	これまで積み上げてきた英文読解の知識を活かし、リーディング力とスピーキング力の強化を行っていく。身近な時事問題などの簡単なニュース記事を題材に、英文の要点を素早くつかみ、それを基に自分の意見をどう発するか、その方法や伝え方、質問の仕方を学んで、実践の中で読む・話す・聞く力を強化する。	
		英会話Ⅳ	総合英語Ⅳで学ぶ英文ライティングの知識を活かし、英会話Ⅲで学んだ内容をさらに応用して、自分の意見を英文で書いてまとめ発話するスキルを養っていく。グループワークを通じて、自分の趣味や興味のあることを題材に簡単に英語にして発話、それに対して質問をする形式を繰り返し、英語の4技能の全てを定着させていく。	
		TOEICⅠ	TOEICは英語のコミュニケーション能力を幅広く評価する世界共通のテストで、特別なビジネスの知識などは必要ない現実に即したテストである。TOEICのスコアアップを目標にしながら英語運用力を高め、その足掛かりとなるよう、はじめてTOEICを学ぶ学生を対象とし、会話練習を多く取り入れて英語のコミュニケーションを楽しみながら、様々な演習・英語のトレーニングを行って基礎となるリスニング力、文法力をしっかりと養っていく。	
		TOEICⅡ	TOEICⅠに引き続き、会話練習を多く取り入れて英語のコミュニケーションを楽しみながら、より難しいリスニング問題や文法問題演習とトレーニングを行ってリスニング力・文法力をさらに高めていきます。また、長文問題にも取り組んで、英文や各種ビジネス文章の特徴や背景知識なども学びながら、基礎的なリーディング力・語彙力も併せて強化していく。	
		TOEICⅢ	TOEICⅠ・Ⅱで身に付けた基礎的なリスニング力・文法力をさらに高めるために、リスニング問題・文法問題に取り組みながら、会話練習を繰り返して実践レベルの問題に対応できる応用力を養っていく。また、初級クラスで学んだ英文や各種ビジネス文章の特徴や背景知識をさらに深めながら、中級レベルのリーディング問題に取り組み、引き続き、読解力・語彙力の強化を行いつつ、速読力も高めていく。	
TOEICⅣ	TOEICⅢに引き続き、さらにレベルの高いリスニング問題・文法問題に取り組み、会話練習を繰り返して実践レベルの問題に対応できる応用力を強化・定着させていく。また、初級クラスから中級クラスで学んだ英文や各種ビジネス文章の特徴や背景知識を基に、実践レベルのリーディング問題演習に多く取り組みながら、TOEICの目標スコアに見合った読解力・語彙力・速読力が身に付くようにする。			

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考	
コ モ ン ベ イ シ ッ ク ス	情 報 リ テ ラ シ ー 科 目 群	ICTと情報倫理	本講義では、様々な事例を参考に、情報社会における諸問題を理解し、それへの対応力を高めることを目標とする。情報機器の急速な発展によってインターネットアクセスが社会常識化している今日、逆に、情報の取り扱いについての基本認識を欠いた人が急増しており、結果として、架空請求やネット詐欺、ソフトウェアの不適切な利用により犯罪の被害者になったり、意図せずに法令に違反するなどの例も後を絶たない。そうならないために、安全に情報を取り扱う方法や考え方について学修する。	
		情報処理Ⅰ (WORD)	情報処理を学ぶことは、一つはコンピュータ・リテラシーを学ぶこと、つまりコンピュータを使いこなす技能を習得することである。文字入力はその基礎である。さまざまな文書をコンピュータで作成し、編集し、そして保存し、また再利用することは、現代社会の中で、必須の技能といえるであろう。本講義では、ワープロソフト (Microsoft WORD) を使い、正しく速い入力技術を身に付け、ビジネス文書・図形・表などを作成していくための、機能を学んでいく。	
		情報処理Ⅱ (EXCEL初級)	表計算ソフト (Microsoft Excel) の基本的な使用方法を身に付け、日本情報処理技能検定協会主催の情報処理技能検定試験 (表計算) 2級レベルに合格することを目標とする。本講義を通して、レポート作成や論文執筆などの活動において、表計算ソフトを利用して数値データを加工し、グラフ化するなどの技術を身に付けることも目標とする。この講義により、表計算ソフトが実社会において、どのような業務に利用されているかを具体的に知ることができる。	
		情報処理Ⅲ (EXCEL上級)	表計算ソフト (Microsoft Excel) の本格的な使用方法を身に付け、日本情報処理技能検定協会主催の情報処理技能検定試験 (表計算) 上級レベル (1級以上) に合格することを目標とする。数値データをもとに、様々な統計処理が行え、高度なグラフ化ができる技術を身に付けて、自分なりに問題解決をする手段としてもらうことが目標である。検定対策が中心となるが、初級レベルの復習から始まり、全体を通して実社会において、どのような業務に表計算ソフトが利用されているかを知ることができる。	
		情報処理Ⅳ (パワーポイント)	Microsoft PowerPointを用いたプレゼンテーションは研究発表や教育現場、ビジネスシーンなどで幅広く用いられている。本講義ではプレゼンテーションというコミュニケーション手段の特色をよく理解し、企画立案の段階から訴求力の高い視覚資料の作成方法、わかりやすい発表技法などプレゼンテーション全般について学ぶ。	
		情報処理Ⅴ (ホームページ)	今やインターネットの代名詞とも言えるホームページの存在であるが、様々な情報を得るばかりでなく、自らが情報を発信することもできるツールである。ホームページ作成ソフトを利用すれば誰でも簡単に作成できるホームページであるが、それを支える基礎技術であるHTMLやCSSについての理解やホームページ内で使用する様々なWebコンテンツ (画像、ロゴ、アニメーション) の作成方法など、ホームページに関する幅広い知識と技能を身に付ける。	
ヒ ュ ー マ ン ベ イ シ ッ ク ス	人 間 と い の ち を 考 え る 科 目 群	こころと体の健康	(概要) 大学生活を送る上で、また卒業後の社会生活を送る上でも、学生自身が自分の心や体について十分な知識を持ち、健康で安全な日常生活を営むことが必須である。また、クラブ活動など体力を付けることが重要な意味合いを持つこともある。このため、健康日本21の標語にもなっている「1に運動、2に食事、きっぱり禁煙、最後に薬」のそれぞれに対応して、専門的な視点からその内容を学び、元気で安全な学生生活が送れるように、その基礎知識を修得する。 (オムニバス方式/全15回) (20 進藤政臣/5回) 医師の立場から「健康日本21」の概要説明および「健康」とは何か、喫煙と病気の関係、受動喫煙に関する諸問題、薬についての基礎知識を講義する。また、AEDの使用と救急救命について実習形式で学ぶ。 (21 廣田直子/5回) 管理栄養士の立場から、栄養に関する基礎的知識および栄養と食事、健康との関連性について講義する。 (29 中島節子/5回) 保健師の立場から、生と性、メンタルヘルスと相談体制、女性の保護について講義する。また、健康診断の結果を踏まえた解説を行う。	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
人間といのちを考える科目群 ヒューマンベシックス	子どもの育ちと教育	子どもの成長発達には連続しており、また、子どもの育ちを支える場は学校以外にも多くある。そのことへの理解が十分でないと、子どもの育ちが円滑に進まないことがある。そこで本授業では、小学校へつながる幼児期に着目し、その成長発達の特徴およびその時期の子どもの成長発達のために重要である教育の基本を理解することを目的とする。具体的には、映像資料や幼稚園教育要領等を資料として、3歳から5歳までの子どもの成長発達の特徴を考える。さらに、学校以外にも子どもの育ちを支える多様な場あることを理解し、そのような場の意義や役割について考える。	
	心理学概論	心理学は科学であることを中心テーマに、心理学全般について学ぶ。心理学についてのビデオをみて、その領域について説明する。また、授業の途中での小テストや、課題の本を読みテーマを決めての討論を行う。一般に考えられている心理学は、科学的な根拠のないものが多い。心理学は確立された方法論をもった科学であり、その方法論も含めて誤解を解くことが授業の目的である。なお、締め切り日を過ぎたレポートは一切受け取らない。レポートを期日通りに提出することもこの授業の目的の一つである。	
	哲学	私たちの常識的な世界の見方に対して、一歩ひいたところから、その価値を疑い、批判的な考察をくわえることで、その真価を見極めていくことが「哲学」の実践である。そのような哲学は、古今東西、さまざまな場所、さまざまな時代で行われてきた。この授業では、西洋哲学のみならず、東洋哲学にも目を配り、それらに共通するテーマを設定し、そのテーマに対する異なるアプローチの仕方を学んでいく。	
	生命倫理	生命をめぐる倫理（道徳・規範）的諸問題を様々な視点から考察し、医療領域における今日的かつ具体的問題に対処できる思考力を養う。生命倫理学の歴史的背景と今日の課題について理解し、具体的な倫理的問題を包括的な観点から把握することを目標とする。1960年代以降、医療領域において生じた倫理的諸問題を個別に取り上げ考察する。	
	対人関係の心理学	対人行動や集団との関わり方などを、個人の特性や環境の面から考察し、人との関係で悩んだり、喜びを感じたりする心理的なメカニズムや、人の行動の生成について学ぶ。講義を中心に進めるが、人間関係づくりのための「対人関係ゲーム」や自己理解を促進する「構成的グループ・エンカウンター」、主張訓練で行われる「アサーショントレーニング」などのグループワークやグループラーニングを取り入れ、知識としての対人関係だけではなく、他者との関係における自己を理解できるような演習形式での学びも体験していく。	
	生涯スポーツⅠ（集団的スポーツ）	実施種目は集団的スポーツの特性を踏まえ「ハンドボール」「ソフトバレーボール」「ソフトボール」の3種目とする。全体を30名前後の3クラスに編成し、クラス毎に種目をローテーションしながら、各種目の基本技術と簡易なルールによるゲームを通して、それぞれの種目の特性を理解し、楽しいスポーツの運営方法について学ぶ。運動技術の獲得の仕方や指導方法を理解することで、スポーツを楽しむために必要な要素について学修していき、スポーツが人間にとってどのような存在であるべきかを実践的に理解する。	
	生涯スポーツⅡ（個人的スポーツ）	本授業における実施種目は個人的スポーツの特性を踏まえ「ニュースポーツ」「トレーニング実技」「バドミントン」の3種目とする。全体を30名前後の3クラスに編成し、クラス毎に種目をローテーションしながら、各種目の基本技術や簡易なルールによるゲームを通して、それぞれの種目の特性を理解し、楽しいスポーツの運営方法について学ぶ。学生が主体となって学修を展開していくことで、スポーツを楽しむためのマネジメントの仕方を実践的に理解していく。	
	スポーツとノーマライゼーション	スポーツは誰もが享受することのできる権利である。ビデオ教材等を用いてパラリンピックや障がい者スポーツの実際について学ぶ。その上で、誰もが参加できるユニバーサルスポーツについて学修し、スポーツがノーマライゼーション社会の実現にどのように貢献するか考える。さらに身近なユニバーサルデザインを調査し、「障がいは人に帰属するのではなく、人と環境の間に存在する」ことの意味について理解を深める。ボランティアを含めた「支えるスポーツ」について学修し、「我々にできること・行動するための要因」について考える。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
現代の日本社会を理解する科目群	日本国憲法	日本国憲法の基本的な枠組、背景、その意義などを理解するために、近代憲法の基本原理（基本的人権の保障と権力分立制）、日本における二つの憲法（明治憲法と日本国憲法）の異同、日本国憲法の基本原理（国民主権、基本的人権の尊重、平和主義）などを明かにした上で、具体的な政府の仕組みと人権保障のあり方についての基本論点を検討しながら理解を深めて行くことにする。	
	新聞に見る社会の動き	新聞を使って社会の動きを考えていく。インターネットの普及により活字離れが目立ち、読書や手書きの習慣が薄れてきている。一番身近なはずの新聞も無読層の増加によって、読まれなくなっている。新聞には政治、経済、外交や社会の動向などが凝縮されており、情報の収集だけでなく、どう読みこなすかが必要になってくる。記事の内容を読み、理解したうえで自分の考えをまとめるという習慣を付けるための授業である。乱れ始めた日本語の良さや文章の作り方も授業の中で実施していく。	
	日本地理	ミクロからマクロへ、また、グローバルから地域へと視点を移すことで日本地理を捉えていくことを目的とする。身近な暮らしの中で目にするものや、これまで当たり前接していた事柄や常識の中から、「なぜ」「どうして」と問い直すことで、日本地理の新たな見方が獲得できるよう展開する。例えば、スーパーで目にする「和牛」と「国産牛」の違いとは何かを紐解いていくことにより、その先に日本のTPP加入による未来が浮かぶよう、素材を選び展開していく。	
	近代日本の歴史	近代以降の歴史を今の生活と関連づけ、取り上げる。教育を初めとして我が国の様々な制度は、明治以降にその枠組みが作られている。そして、小学校から高等学校まで、日本の歴史（分野）教科書の半分程度に当たるページは近代に割かれている。しかし、その多くは戦後の復興までが詳しく取り上げられており、復興以降の歴史については空白の状態と言っても過言ではない。そこで、これまで学校で学んできた日本の歴史と、現代の生活とを繋ぐ戦後史を中心に取り上げ、授業を展開していく。	
	経済入門	本講義は、世の中で暮らしていくために必要な「経済の仕組み」を、経済学的な視点に立って「生きた知識」として理解することを目的とする。大まかな内容は、①経済の見方（基礎知識）を身に付ける、②日本経済のほか欧米やアジアなど海外経済の状況を知る、③グローバルな視点から経済を見る眼を養う、④海外経済との比較などを通じて日本経済の課題を探る、などである。	
	国際経済	本講義は、経済的な相互依存関係を深化させている国際社会について、財・サービスの移動の面から整理する。特に、資源の少ないわが国は、他国から資源を購入して商品とし、これを国際社会で販売することで経済発展をしてきた国である。故に、国際社会とわが国の経済関係について理解することが本講義の目的になる。内容としては、国際収支や経常収支の問題、貿易自由化の利益の問題、グローバル・インバランスの問題などについて考える。	
地域を考える科目群	地域の歴史	政治・教育・文化・諸産業・交通運輸等々にわたって、長野県の歴史上の人物の生き様や業績を通して、その生きた時代を、日本の歴史上に位置付けながら検証していく。古代・中世・近世・近代・現代と、それぞれの時代の群像を取り上げる。その中で、地域の歴史の学び方を、歴史資料の所在・調査・研究などの面から、自分なりにどのように取り組んでいくのかを、共に考え、現地調査も踏まえながら自らの成果をまとめられるようにする。	
	地域と文学	信州の文学は深淵かつ多様である。信州にゆかりのある文学者や研究者を取り上げ、人物に親しめると共に、出身地や略歴、代表作等をわかりやすく紹介する。地域に根ざした昔話も扱う。講義は、まず教員による代表作の紹介を行い、あらすじや描写の読み取り、人物像の変化などを通して、読み方や味わい方の仕方を学ばせる。これらの基礎的な力を身に付けさせた後、学生が主体的に学べるように、他の作品も紹介し、各自で自分の興味・関心に応じた調べ学習を行わせる。調べたことや読み取ったことを互いに発表させた後、評価する。分野は地域ゆかりの近代文学や詩歌、昔話、児童文学作品など幅広く扱う。	
	地域の伝統行事	日頃から体験している年中行事から始まり、各地に今に伝わる伝統行事について学ぶ。主として長野県内の代表的な行事を、それぞれの地域ごとに扱い、地域に残る歴史と民俗事象を掘り下げていく。さらに、身の回りの暮らしの中での伝統行事を、今日までの変容を追いながら、どのように調べて記録として残していくのか、それを後世にどのように伝えていったらよいかを、具体的な事例を挙げながら探求していく。	
ヒューマンベシックス			

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
地域を 考える 科目群	地域社会と学校教育	学校教育では、新学習指導要領で、「生きる力」を育成するという基本理念が継承され、子どもの「確かな学力」や「豊かな人間性」などを育むことが求められている。特に知識・技能を実生活で活用する力や、異なる文化や背景を持つ人々との関係を構築する力は、これからますます必要とされている。それらの力を育成するには、学校の外部の力を有効に活用していく必要がある。地域社会における学校の意味を問い直し、「信州型コミュニティスクール」の取り組みを研究すると共に、地域社会に根ざした学校づくりを追究していく。	
	地域経済史	本講義は、わが国が工業化される過程で発展しあるいは衰退した地域産業（地場産業）の全体像を踏まえた上で、地域経済の形成に大きな影響を与えた地域産業を取り上げ、それらの歴史的展開について講義する。特に、本大学が立地する信州の地域産業については、工場形態での発展によりわが国最大の外貨獲得産業となった器械製糸業、および、一時期は地域経済に大きな比重を占めながらも戦後の経済発展のなかで産業としての影響力を失い、伝統工芸としての業態で存続することとなった他の絹関係品生産を対比しながら、地域産業の動きを理解させる。	
	地域課題研究	地域社会を支える人材を育てることは、地域社会の存続や発展にとって大きな課題である。したがって、本科目は、地域で取り組まれている人づくりに関わる諸活動に実際に参加することを通して、地域が抱える人づくり(教育)の課題を発見することを目的とする。そして、さらに、現在そして将来にわたり、自分が地域の人づくりや教育課題解決のためにできることは何かを考え、その方法を見出し試行してみることをも目的としている課題解決型の授業である。	
ヒューマン ベシックス  異文化理解と 国際交流科目群	日本文化	本講義では、日本で培われてきた芸能・文化芸術・自然観・食生活・住生活・建築・武道・宗教・習俗等々の文化を全般にわたって学び、日本文化の基礎知識を総合的に養う。ジャポニズムからディスカバー・ジャパン、クール・ジャパンなど日本文化ブームになっているが、一過性の日本文化ではなく、総合的に日本文化の豊かさ、真の魅力の理解を深める。	
	異文化理解	異文化理解では、自分自身の文化と他者の文化とを比べ、それらを意識することにより、どのように文化間において差が見られるかを、英文等を通して理解していく。その際に、それらの異文化間での違いについての事象を分類化し理解したり、その事象を具体化して自分自身のケースと比較したりすることで理解していく。これらにより、自身の文化をさらに意識していくと共に、他の文化に対し自文化の観点からのみ理解していくことを避けていく考え方を身に付ける。	
	比較文化	アメリカ文化を代表とする欧米文化と日本文化を比較することによって、欧米的な考え方や欧米文化への理解を深めると共に、我々が慣れ親しんでいる日本文化を客観的に見直しに行く。題材として、贈答・挨拶・食事・住居・服飾・買物など、日常生活上の身近なものを取り上げる。 情報網や交通網が発達した現代であるが、それでも私たちの行動様式や考え方は、国や民族が継承する文化・伝統の影響を強く受けている実態を学ぶ。	
	文化人類学	異文化を知ることでも自らを確認し、その上で両者を相対化しうる感受性を多少でも身に付けること—これが講義の目指すところである。当たり前の世界を疑い、文化とは何かを考える。文化人類学は難しい学問ではない。抽象度の高い理論についても触れるが、基本的には身近にある（「理由はわからないけど、そうなっている」）事例を捉え直して試みるのが重要である。	
	音楽の歴史と鑑賞	西洋音楽史を中心に、それぞれの時代を代表する楽曲をCDまたはDVDで鑑賞していく。毎回テーマに沿って聴く観点を説明し、特徴を捉えやすくする。時代の流れと共に音楽がどのように発展していったのか、また我々人間の生活との関係を中心に講義を進める。さらに日本の伝統音楽や西洋から影響を受けた現代の日本の音楽の現状についても触れ、邦楽と洋楽の音律の違いや楽器の違いなどを通じて、様々な文化を理解し音楽の多様性を学んでいく。	
	海外研修 I	本授業では、事前研修、現地研修、事後研修から構成され、異文化体験を通じて、生きた語学力の向上と異文化理解を深める。現在推奨している現地研修プログラムとしては、オーストラリアのニューカッスル大学、大韓民国の済州大学、東新大学、中国の嶺南師範大学、米国のノートルダム大学、ドイツのフライブルグ大学などがある。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
異文化理解と国際交流科目群	海外研修Ⅱ	本授業では、事前研修、現地研修、事後研修から構成され、異文化体験を通じて、生きた語学力の向上と異文化理解を深める。また、本授業で実施される各短期プログラムは「海外研修Ⅰ」と同様のプログラムになるが、本授業は、「海外研修Ⅰ」で参加したプログラム以外のプログラムに参加することで、複眼的に国際社会を理解することを目的としている。	
	海外事情Ⅰ	この授業は、海外の協定校の教員が、自国の政治・経済・社会・文化などについて講義する。嶺南師範大学（中華人民共和国）の陳俊英先生と、東新大学（大韓民国）の柳在淵先生が講義する予定である。現代社会はグローバル化が進み他国との相互依存関係が経済的にも文化的にも深化してきている。そこで、本授業では、直接海外の先生に来学いただき自国の状況を解説していただくことで、学生諸君が国際社会に目を向け、他国を理解することを目的としている。	
	海外事情Ⅱ	この授業は、海外の協定校の教員が、自国の政治・経済・社会・文化などについて講義する。また、本授業で実施されるプログラムは「海外事情Ⅰ」と同様のプログラムになるが、本授業は、「海外事情Ⅰ」で参加したプログラム以外のプログラムに参加することで、複眼的に国際社会に目を向け、他国を理解することを目的としている。	
ヒューマンベシックス 環境・自然を科学する科目群	数学の基礎	どちらかというと数学は苦手だったという学生を対象に、数学に興味を持てるような、論理的にものを考える習慣を身に付けられるような講義にしたいと考えている。当たり前のように思っていること、例えば「分数の割り算はひっくり返して掛ける」、が「どうしてそうすれば良いのか」を割り算の意味から考えるなど、「なるほど」と受講生が納得できるようにグループワーク形式の授業形態も取り込む。また、実践的な計算力やデータの解析力を身に付け、基礎統計学の学びへと接続させたい。	
	生物学の基礎	生物学の進歩は急激で、マスコミなどで報道される健康や病気に関わるニュース、遺伝子に関する話題、さらには絶滅危惧種の存在などに象徴される環境問題などの内容を正しく理解するために、生物学の基礎的知識を把握しておくことの重要性は増している。特に本講義では生物としての人間を理解するために、ヒト（生物として人間を扱うときはカタカナで表す）を中心として、生物に共通の構造や反応、現象などの基礎的内容について学修する。生物に関する科学的な内容を扱った新聞記事などを材料にして、グループ討論形式の授業も取り入れたい。	
	化学の基礎	ヒトはじっとしている時でも運動している時でも、体の中でエネルギーを作り出して使っている。食べ物を材料にしてこのエネルギーを作り出すのは、体の中のいろいろな細胞で起こっている化学反応である。薪を燃やすたき火も、食べたものからエネルギーを作る反応も、化学の目で見ると同じような反応である。この講義では、毎日の生活に関わる化学物質や化学反応に目を向け、「化学」の目で様々な現象を理解できるようになることを目的とし、そのための基礎となる無機化学を中心に学修する。	
	基礎統計学	本講義は、データの客観的な分析手法について学ぶことを目的としている。はじめに、量的なデータおよび質的なデータを整理して検討する方法について講義する。次に、データを集約して全体像を把握する方法について学ぶ。また、集約された数値の見方と意味について考える。さらに、サンプルデータを調べる事により全体像となる母集団を把握する手法について基本的な考え方と手法を学ぶ。	
	地球環境と人間生活	ビッグバン宇宙、地球の生成、生命の誕生と進化のおおよその流れを把握する。その中でオゾン層の出現やその破壊と克服の過程について学ぶ。次に地球温暖化のメカニズムを学び、産業革命以降人類の生活の進歩・発展とその裏側で進んでいた二酸化炭素の大量発生に伴う地球温暖化現象を概観する。エネルギー源の変遷（木炭・石炭・石油・原子力）を理解し、それぞれの長所・短所を調べながら、生活水準を維持できるだけの自然エネルギーの可能性があるかについても検討していく。	
	地域環境と生態	一番身近な環境問題がごみ問題である。快適なライフスタイルがごみを増やし、地球を汚してきた。大量生産・大量消費・大量廃棄の悪循環の中で、なかなかごみ減量が進まない。地球の資源は有限である。人々はその資源を惜しみなく使い、ごみとして捨てることで経済成長してきた。今、まさに「成長の限界」（1972 ローマクラブ）が示す通りの社会になっている。そこで、松本市のごみ行政の取り組み状況を参考にし、将来に向かってこのごみ問題とどう向き合うべきかを考える。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
ヒューマンベシックス	環境・自然を科学する科目群	ごみ処理と循環型社会	微生物は私たちの身の回りのどこにでも存在し、病気の原因となったり、発酵食品などで私たちの役に立ったりしている。それでは、人と微生物の関係はこれだけであろうか。この講義では地球上のあらゆる環境で生活している微生物と地球環境の関わりについて、微生物の種類や性質、地球環境の維持に貢献している微生物の役割などの基礎的なことから、微生物を利用した環境改善など応用的な面まで分かりやすく概説する。
	環境社会学	地域環境には、日本や世界各国の広がりのある区域から地方の自治体、集落単位の小さなものまで様々な形が存在している。その中で生活する私たちは、周囲の人々と生きていけることに「誇り」を持つと共に「感謝」をし、さらに「責任」を果たさねばならない。その責任こそが民度なのです。「日本は民度が高い」と言われているが、殺伐とした事件の増加やネット社会の到来で民度の崩壊も予測される。今後も不可欠なネット社会と民度の重要性を学生自らが考えるなど、多層的に研究し、発表する力を付けることを目的とする。	
キャリア形成	キャリア教育科目群	キャリア入門	本講義ではキャリア教育の初歩的段階として、自らのキャリアを考える上で必要となる情報の提供をし、併せてこれらの情報を基に「考えてもらう」ことを目的としている。具体的には「自らのキャリアを考える上での情報提供」「実際に自らのキャリアを考える」「就職活動の基礎事項の情報提供」の3点に焦点を絞って展開する。
		キャリアデザインⅠ	この講義は、大学卒業後、社会の一員としてそれぞれのキャリアを積み上げていく際に土台となる基本的な考え方を学ぶ。ここで言うキャリアとは、単なる「経歴」や「仕事」ではなく、「自分らしい社会や仕事との関わり方」ということを意味している。3年次後期以降、具体的な進路や就職先などを考えていく際に、自分なりの判断基準を持てるようになることが、この講義の最大の目的である。また毎回講義の一部では、就職活動の際、必須となる筆記試験（一般常識）の対策も行っていく。
		キャリアデザインⅡ	この講義では、大学卒業後の自分のキャリアを主体的に考え、それを実現していくための手法を応用的に学んでいくことを目的としている。納得のできる進路を選択するには、自己理解を深めること、社会や職業に対する知識と自分なりの考えを持つこと、またそれらを分かりやすく他者に伝えるスキルを身に付けることなどが重要となる。これらの知識やスキルを身に付けるために、これまでの大学生活での経験を振り返り、自己のキャリア形成のための具体的な計画を立てる。
		ワークインフォメーション	本講義では、これから「社会人として、そして労働者として働く」学生が、働く上での諸問題をきちんと克服し、より良い働き方を実現できるための情報を提供する。大きく①働く上での中心的な法律の説明、②仕事と生活のバランスの取り方、③社会保険の説明、④働くことで問題が生じた際の解決方法、⑤万が一が転職や失業した際の手続き、などを扱う。
		学校ボランティア活動	この講座は、教員に求められる資質を理解し、自らの教員としての適格性を把握する機会とすると共に、大学で学ぶ理論と小学校現場での体験に基づく省察を繰り返すことで、教員としての実践的指導力の基礎を育成することを目的としている。特に、小学校生活の1日を理解し、小学校教諭の職務、校務分掌、役割、児童への関わり方、同僚性などを実際の生活の中から観察したり、実際のボランティア活動を通して学んだりして、教員を目指す自分自身の願い、課題を明確にし、課題解決に向けて自分自身への理解を深める。



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 基 礎 科 目	教職論(初等)	学校現場には「いじめ」「暴力」「不登校」をはじめ、授業が成立しないなど、解決が求められる課題が山積している。しかし教師の対応によっては、学級の状況が大きく変わる。現場での具体的な事例を基に、問題の分析や対応の仕方、解決法について、学生自身が探っていくように、授業に対話・討論を取り入れ深めていく。1年の前期の段階で、教育実践や教師の仕事をイメージできるようになることは、教師を目指す学生には不可欠である。	
	教育基礎論(初等)	ヒトは、人間の社会で生活する限り、その社会で使用されている言語、風俗習慣、考え方などを身につけ、社会の一員として生活できるようになっていく。これが教育の基礎である。これは誰もが経験していることであり、人間の社会生活には、常に生じている教育という事象である。これは人間の社会が継続し発展するためには、教育という営みが不可欠であることを示している。そこで、その教育を考え、実践するための基本的な視点について学修することを目的とする。具体的には、人間の特質、教育の意義及び役割、教育の思想、歴史、理念について取り上げる。	
	教育史(初等)	近世から昭和戦後期にいたる日本における教育の展開を概観し、日本の教育の発展に関する歴史的知見を得ると共に、歴史的視点から、現在の学校や社会が直面しているさまざまな教育問題を捉え、それらを読み解く力の基礎を身に付けることを目的とする。具体的には、近世の教育、近代学校教育の成立、小学校の成立と普及、学校と家庭や社会との関係、大正自由教育の思想および実践、戦後の教育制度の成立などについて取り上げていく。	
	教育心理学(初等)	教育心理学という学問は、教育について科学的に研究することを目指すものである。この授業では、教育についての科学的思考方法の基礎となるデータリテラシーを実習で学び、関連する教育に関わる問題を副読本とディベートによって考えることとする。学生には次のような力を身に付けてもらうことを目標とする。 ・教育心理学という学問の基本的性格を知り、教育に科学的思考法を適用できるようになること ・読み書き聞き話すという4つの能力を統合して、自分の意見が言えるようになること ・ディベートができるようになること ・データリテラシーについて学ぶこと	
	発達心理学(初等)	幼児、児童および生徒の心身の発達および成長の過程についての知識を身に付け、さらに学校現場において発達心理学の知識を生かした児童・生徒への対応を可能にするための理解を深めることが目的である。また、発達心理学と深く関連する「脳」についての知識を深めることで、子どもの行動や日常生活態度の理解を深める。各授業時間では、小項目について的小テストおよび課題としての図書を読み感想レポートを書き、それについての討論を行うことで、児童・生徒の理解を深めることができる。	
	教育制度論(初等)	90年代以降今日まで、日本の教育統治システムは学制導入期、戦後改革期と並ぶ、抜本的な改革が進んでいる。この新たな教育統治システム(教育ガバナンス)の理念と実際について、特に近年の教育法制度改革を切り口に理解させることを目標としている。 テキストを基に90年代以降の教育制度改革と地方自治体の教育改革を取り上げ、レポーターによる報告をもとに学びあう。理解が一定程度深まり、受講生の条件が整えば、授業の時間外での調査訪問(あるいは見学訪問)の展開も考えたい。	
	学校経営(初等)	公教育の一翼を担う「学校」は、近代において、社会的また文化的産物として誕生したこと、その時「子ども」の発見があったこと、「子ども」の発見は「おとな」の発見でもあったこと、社会と文化とが成熟する過程の中で「学校」は階層化し類型化したこと、学校の組織と運営の多様な当事者とフィールドがあること、日本の学校経営を世界の中においた時の特徴、今日的な学校経営の課題について、教職に就くことを志す者として理解することを目標としている。	
	教育課程総論(初等)	本講義では教育受講者が課程の意義全般に関する知識を獲得するとともに、実際の教育課程の編成の考え方と実際的なスキルを身に付けることを目標及びテーマとする。 教育課程の意義、教育課程の編成の考え方と具体的編成、学力論、国内外の教育課程改革について講義する。テーマによっては、模擬体験、プレゼンテーション、ディスカッションの手法を取り入れる(例えば、特色ある教育課程づくりや教材選択と使用の模擬体験、諸外国のカリキュラム改革を学生が分担して調べプレゼンテーションとディスカッションを行うこと、など)。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 基 礎 科 目	初等国語科指導法	小学校学習指導要領の示す「話すこと・聞くこと」「書くこと」および「読むこと」の3領域と書写を含む「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の1事項を中心に行う。各学年の目標、内容および指導法、言語活動例の理解を深め、国語科教材の特色を理解した上で教材研究の仕方を身に付け、指導法を知る。講義において学生は板書やグループ等の実践的活動を通して指導技術の習得を図る。学生は作成した学習指導案を用いて模擬授業を行い、評価を受ける。発表や討議を通して主体的・協働的に学ぶことで指導法を身につける。	
	初等社会科指導法	小学校社会科で扱う具体的な単元および授業を取り上げる。実際の授業の様子をVTRや模擬授業にて確認したり、教材研究や指導案作成を行ったりすることで、暗記中心の社会科と言う固定観念を打破し、児童の主体的な学びを重視した授業を指導し理解できる講義内容とする。具体的には、小学校の各学年ごとに授業概要の理解を図り、教材研究や指導案作成、模擬授業の機会を設けることで、社会科を指導する実践的な知識及び技能を身に付けさせていく。	
	初等算数科指導法	(概要) 小学校就学前後の幼児・児童の数学的概念の獲得と、小学校算数科の指導法を関連づける。算数科の学びの基本について、その内容や指導方法を「数と計算」「量と測定」「図形」「数量関係」の4領域で考察し、指導案作成まで導く。興味を引き出すための教材研究を重視し、模擬授業においても発問の内容とタイミングを学び、間違いを重ねつつ正解にたどり着く手法を体得させる。講義中にアクティブラーニング(AL)の有用性を体験する。 (オムニバス方式/全15回) (① 増田吉史/8回) 講義の概要説明と、幼児期から小学校に向けて指導の系統を考察する。教材研究や模擬授業を通し、遊びや生活の中での数や量、形などの概念の獲得を学び、指導案作成に向け実践的に取り組む。 (兼任補充/7回) 子ども達の興味を引き出すために教材研究を重視し、課題解決型のプロセスを取り入れるため、適切な学びのテーマ設定を考え、模擬授業を中心に算数科の指導法を体得する。	オムニバス方式
	初等理科指導法	(概要) 小学校理科における理科教育の指導法について理解を深めると共に、単元構想や45分の授業構成に関わる実践的な基礎知識や技能等の諸能力を身に付けることをねらいとする。 特に小学校3～6学年の単元の学習内容を系統的に整理し、各単元の中で指導法を抽出する。 実際の授業VTRを視聴し、同一単元における多様な指導法を比較・検討し、それぞれの方途における授業者の役割の違いを考察する。 (オムニバス方式/全15回) (兼任補充/5回) 生命と周囲の環境との関わり、栽培と飼育など<生命・地球>の分野の指導法を担当する。教材研究を深めることにより模擬授業のテーマ設定を行い、アクティブラーニング重視の展開を体験させる。 (⑨ 澤柿教淳/10回) <物質とエネルギー>分野についての教材研究を重視し、観察・実験などを担当するとともに、授業の単元構想や指導案作成と評価、ICTの活用などにも言及する。	オムニバス方式
	初等生活科指導法	(概要) 小学校低学年にとって、多くの具体的な活動や体験を通して身近な人や社会および自然と関わることが大切であることを理解する。また、実際の授業VTRを視聴したり、同一単元における多様な指導法を比較・検討したりして、それぞれの方途における授業者の役割の違いについて考察する。 (オムニバス方式/全15回) (12 澤柿教淳/8回) 生活科の教科の目標と内容について理解する。内容の内、季節の変化と生活、身の回りの物を使った遊び、植物の栽培を主に扱う。また、生活科の指導と評価、授業の構想と実践、講義の総括について担当する。 (13 秋田 真/7回) 授業案や実際の授業を通して生活科の特質を理解する。生活科の年間指導計画、単元、それぞれの授業を構成し、指導案を作成すし、どのように実践するかを学ぶ。指導案の内容は「学校を探検しよう」、「先生の仕事」、「秋祭りをしよう」、「私の成長調べ」などである。	オムニバス方式
	初等英語科指導法	小学校外国語活動において、第二言語習得理論、小学校外国語活動の様々な考え方を理解し、それらを通し指導案を作成していく。また指導案作成の際には、児童の身近な話題や事柄等を取り入れられるように教材研究し教材を作成する。それらの指導案と考えられた教材を基に、最初は部分的な模擬授業を行う。それにより模擬授業を行う側は他の学生からのフィードバックを受け、授業を受ける側の学生はどのような指示の仕方が児童にとってわかりやすいものであるかを体験的に理解していく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 基 礎 科 目	初等音楽科指導法	小学校学習指導要領に基づいて目標や指導内容について学び、各学年ごとに具体的な指導実践例を提示していく。次に指導案の作成、模擬授業の実践を行い、授業づくりの評価を行う。また、音楽指導の教育内容や目的と教材の関係について歌唱、鑑賞、器楽等に考察し、授業づくりの工夫ができる力を養う。教科としての音楽の持つ独自性から、小学校における音楽指導を中心に、広く一般社会における音楽教育や家庭における音楽教育についても視野を広げ、さまざまな側面を持つ音楽指導法を理解する。	
	初等図画工作科指導法	本授業科目は、現行学習指導要領の領域構成に準じ、表現領域は絵、造形遊び、工作（含デザイン）、立体の順に講義し、続いて鑑賞領域を概説する。中盤にワークショップを設け、総括的課題として学習指導案の書き方を指導する。 図画工作科の目標・理念および指導内容を現行学習指導要領を基に理解し、指導能力および題材開発能力の伸長を目指す。	
	初等家庭科指導法	小学校家庭科では何を対象としてどのように学ぶのかという問いを、現代社会における子どもの生活課題と家庭科教育の歴史の変遷から考え、子どもの発達段階や生活課題から授業を構想し実践することを学ぶ。前半では教育目標と内容、学習方法などの基本を理解し、実践記録を読んで指導方法などを学び、家庭科の授業イメージを広げる。後半では、演習を通して、授業の作り方、授業の改善方法を、模擬授業を中心に具体的に学ぶ。	
	初等体育科指導法	本授業は教師を目指す学生が体育科教育に関して理解しておくべき内容について、小学校学習指導要領解説体育編に基づいて理解し、小学校体育授業の各領域について、理論と指導の両面から学修していく。学年ごと各領域の内容について学修した上で、授業づくりに必要な目標、内容、指導計画、学習指導、学習評価について理解し、単元観、児童観、教材化の方向、単元計画などの指導の視点を踏まえた1単位時間の授業展開ができるような指導案作成に取り組み、実践的な指導法の習得を目指す。	
	道徳教育指導論（初等）	学習指導要領の改訂により、確かな学力を基礎とした生きる力の育成を目的に、道徳教育は最重点課題の一つとして教科化が決定したことから、その意味や今後の対応を考える。特に「道徳科」における授業理論と指導方法を理解することで、小学校における道徳教育の意義と内容を多角的な視点から、構造的に学ぶ。また、学校教育において効果的な道徳教育を展開するために必要な内容と方法を、模擬授業を通して具体的に修得すると同時に、今後の望ましい道徳教育を考え、「道徳科」授業実践への意欲を持つことを目的とする。	
	特別活動指導論（初等）	特別活動はよりよい集団活動を通して行われることの意味を考え、教育課程のすべての領域と深いつながりがあることや、学級経営にとって大切な教育活動であることを理解する。また、児童生徒同士の関係や教師との関係などがその活動の基本になることから、人間関係のリレーションについても理解を深めることを目的とする。 特別活動の意義や目的、実施上の課題などを考察し、その重要性を理解する。特に各内容（学級活動・児童会活動・クラブ活動・学校行事）の特質を把握し、活動の実例や指導案の検討、評価のあり方を、ビデオ視聴や参観実習により体験的に理解する。	
	教育方法論（初等）	教育方法に関する基礎的な理論について、教育学と心理学の両視座に立ち学修すると共に、その基礎的な活用の仕方についても修得することを通して、小学校教育における実践的な力を高めることを目標にした授業である。学習指導の原理と方法について、学習教材、学習形態、相互交流の観点から考察した上で、授業の質を高めるための授業研究と授業改善について、構造的に捉える力を養う。加えて、情報メディアの活用による授業実践のあり方についても学習し、かつ実践的な力量も育てる。	
	生徒指導・進路指導（初等）	（概要）本授業は、生徒指導の理論および方法についての知識を身に付け、さらにより実践に対応できる理解を深めることである。各授業時間では、小項目について的小テストおよび生徒指導関連の図書を読みレポートを書き討論を行う。さらに、進路指導についても講義とロールプレイを行う。 （オムニバス方式／全15回） （1 川島一夫／8回） 生徒指導に関する理論の紹介と小テストおよび課題としての図書を読み感想レポートを書き、それについての討論を行う。進路指導についても同様の形式で授業を行う。 （10 岸田幸弘／7回） 講義およびロールプレイによる演習、グループによる討議を繰り返し行い、生徒指導の理論的知識と実践へのトレーニングを行う。	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専 門 基 礎 科 目	教職に関する科目群 教育相談(初等)	(概要) 教育相談の理論と方法についての知識(カウンセリングに関する基礎的な知識を含む)を身に付け、より実践的な対応のために児童生徒理解、保護者対応、生徒指導上の諸課題についての対応など、より具体的なスキルを身に付ける。 (オムニバス方式/全15回) (1 川島一夫/8回) 教育相談に関する理論の紹介と小テストおよび課題としての図書を読み感想レポートを書き、それについての討論を行う。 (10 岸田幸弘/7回) 講義、ロールプレイによる演習、グループによる討議を繰り返し行い、理論的知識と相談の実践に自信が持てるようにする。	オムニバス方式
	国語科概論	語彙、音声、文法、文字表記等の日本語の基礎的な知識を習得し、言語の機能としての国語の特質を理解する。伝統的な言語文化の特色について理解するとともに、書写の基礎的素養を身につける。学習指導要領については、「話すこと・聞くこと」については事柄の順序や目的や意図の重要性等、「書くこと」については文章構成や事実と感想・意見等の違い等、「読むこと」については文種の違いによる表現の特徴等の、全体像を理解する。学生の言語能力を育成し、国語科について理解し、思考力・表現力を伸ばすことが最終到達点である。	
	社会科概論	学校教育の中での社会科の位置付けと、その理論について扱う。そして、各学年の学習内容に即した目標や内容を扱うことで、社会科教育を理解する上での基礎を養う授業展開とする。社会科の位置付けでは、学習指導要領の変遷や総合的な学習の時間との違いについて取り上げる。社会科についての全般的な知識を高めるために、社会科における教材の内容について深く理解することが目的である。	
	算数科概論	ポリアの『いかにして問題をとくか』を教科書に、実際に[1]問題を把握せよ。[2]問題を解きほぐせ。[3]解答せよ。[4]解答を反省せよ、を問題解決を通して体験していく。 クライン、モーリス【著】「何のための数学か—数学本来の姿を求めて」にも触れる。 数学的思考法の指図書として愛され続けてきたポリア『いかにして問題をとくか』を教科書に、実際に問題解決をしていく。 多くの算数の有名な問題解決問題を厳選するので、それに挑戦し、実際に自ら問題解決を行い実感していく授業である。	
	自然科学概論	自然の事物・現象に興味をもち、人として謙虚かつ素直に自然と向き合い、科学的に探究することの有用性を、実感を伴って理解することができるようになることをねらいとする。 身近に見られる自然現象を数多く扱い、その中に潜む自然の法則や科学の本質を体験的に理解する。また、「ろうそくの科学」(ファラデー)を通読し、科学者の姿勢を感得したり、科学史の歩みを追体験する。	
	生活科概論	(概要) 具体的な活動や体験を通して、人が身近な社会や自然、他者と関わりながら成長していくことの大切さを、実感を伴って理解することができるようになることをねらいとする。 (オムニバス方式/全15回) (12 澤柿教淳/8回) 特に、生活科の学習中に見られる子どもの姿を数多く扱い、それを追体験することを通して、子どもにとっての気付きについて考察したり、生活科における授業者の役割を見出したりする。季節の移り変わりと自然環境の変化、人々の生活の変化などに気付き、表現する力を身に付けることを通して、自己実現を目指す経験の重要性を講義する。 (13 秋田 真/7回) 生活科の目標としての具体的な活動や体験を通して、社会および自然とのかかわりに関心を持つことの大切さと、それをどのように授業の中で具体化させるかについての講義を行う。	オムニバス方式
	英語科概論	「英語を学習するということほどのようなことであるのか」、また「何のために英語を学習していくのか」等を、小学校・中学校・高等学校の一貫性の観点から考え学んでいく。そのために小学校の外国語活動、中学校、高等学校の連携の在り方も指導の在り方等から考えていく。また英語にまつわる他の知識(指導法の歴史、4技能にまつわる指導やその考え方等)の入り口となる部分を学びながら、英語科教育の在り方を理解していく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門基礎科目	音楽（歌唱）	小学校教諭として必要とされる、音楽の基礎的な知識と演奏技能を歌唱することによって学び、豊かな音楽表現を目指す。まず読譜の練習としてソルフェージュ（視唱）を行い、発声練習とともに声を出す訓練を行う。音感やリズム感を楽しみながら身に付けるためにわらべ歌や遊び歌、替え歌など様々な楽曲を通して学んでいく。そしてただ歌うだけではなく、遊びやゲームの要素、ステップやダンスなど動く活動も取り入れていく。また声のアンサンブルによってハーモニーの美しさや共感する喜びを味わい豊かな音楽表現を探究する。	
	音楽（器楽）	小学校教諭として必要とされる、音楽の基礎的な知識と演奏技能を様々な楽器を通して学び、豊かな音楽表現を目指す。まずは読譜のための基礎知識としてリズムに関して取り扱う。簡単なリズム楽器やポディーパーカッションなどを通してリズム感を養う。次に音高の理解と共に旋律楽器としてピアノ、鍵盤ハーモニカ、リコーダーなどの楽器を経験し、演奏技能や音色に対する感性を養う。またアンサンブルを通して豊かなハーモニーと共感する喜びを味わい、その成果を発表できるようにする。	
	基礎造形 I	本授業科目は、前半を鉛筆主体の素描課題、後半を水彩絵の具主体の着色課題で構成する。前半では写実表現の基礎をその原理から学び、後半では水彩絵の具の特徴に習熟しつつ色彩表現の基礎を学ぶ。 図工美術題材の構想・開発に有益な鉛筆・水彩絵の具を中心とした諸課題を通じ、描画着色技法の系統的習得を目指す。	
	基礎造形 II	毎回の授業内容は大きく次の4つのパートで構成される。①主題理解を狙う概説（板書形式）を理解する。②提起された主題と係り系統的に配列した実技課題を行う（メイン・パート）。③相互鑑賞。④映像資料鑑賞（パワーポイント）を主軸とした総括。 図工美術題材の構想・開発に有益な造形原理的内容の理論的・体験的理解を深め、一連の実技課題への習熟を目指す。	
	家庭科概論	小学校家庭科の指導内容一家庭生活と家族、衣食住、消費生活と環境一について、知識を身に付けると共に、生活に関わる基礎的技術・技能の習得も目指す。現代に生きる児童の生活課題を勘案して、児童が生活をより良くしようと意欲的に取り組める指導方法を、実践的、体験的に学ぶ。	
	体育 I	本授業は小学校体育授業の「陸上運動」および「ボール運動」について、実技能力(示範能力)と指導能力を身に付けることを目的としている。陸上運動では「短距離走」「ハードル走」「走り幅跳び」「走り高跳び」について、ボール運動では「ゴール型」「ネット型」「ベースボール型」について、高学年の内容を中心に学修していく。各運動の特性や技術のポイント、ルールなど、基本的な知識を理解すると共に、基本技術を獲得できるようにする。	
	体育 II	本授業は小学校体育授業の「体づくり運動」「器械運動」「表現運動」について、実技能力(示範能力)と指導能力を身に付けることを目的としている。体づくり運動については学修のねらいと内容について実践的に学修していくが、低学年の器械運動指導と関連させながら学修を進める。器械運動については「マット運動」「鉄棒運動」「跳び箱運動」の各種目の高学年で示されている基本技を中心に学修していく。表現運動は「表現」と「リズムダンス」の基本的な動きを使った踊りについて学修する。	
専門応用・発展科目	国語科教材研究	必修科目である「国語科概論」「初等国語科指導法」を基盤とし、小学校国語の主たる教材の中から教材を複数選び、教材研究を行う。文学的文章を読むことや、論理的文章を読むことや書くこと、音声言語教材、伝統的な言語文化の3領域・1事項に沿った教材の特質を生かした学習指導案を書いていく。授業は、受講者による教材研究とそれらに基づいた学習指導案の立案、模擬授業実践を中心に据える。授業形態は、演習、発表、討論などであり、学生に主体的・協働的に学ばせる。	
	社会科教材研究	授業実践のため、指導案を作成できるようになることを目的とする。各学年の指導案を作成したり模擬授業および研究協議を行ったりしながら、実践力育成を目指す。特に子ども自らが設定する中心発問づくりや、主体的に学ぶための場面づくりができる教師の育成を目指す。中心発問づくりでは、提示された資料と子どもの認識の落差から生じる「なぜ」という疑問から、子ども自らが知的に学びたいような授業のデザイン力を育む。また、体感・納得を伴った指導のあり方についても扱っていく。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門応用・発展科目	算数科教材研究	算数教材研究で重要な、「数学的な考えを育てる指導のあり方」「問題解決力を育てる指導のあり方」「個に応じた指導のあり方」「評価のあり方」「指導体制や家庭との連携のあり方」「補充的な学習、発展的な学習やコース選択の指導の実際」を順次取り上げていく。小学校6年間を通した理論と実践の関係を理解することにねらいを置き、児童の実態と教材の内容の分析、指導法の工夫等を、具体的に優れた実践を紹介し、指導計画立案や学習指導案作成を通し要点を捉え、学習の主体性を尊重する指導のあり方について学ぶ。	
	理科教材研究	子ども特有の自然認識や素朴概念、思考過程などを理解すると共に、子ども理解に立脚した自然教材のあり方、および、それらを用いる授業者の働きについて実践的に考察することができるようになることをねらいとする。特に、小学校における実際の授業VTRを視聴し、発言や行動を分析したり、様相の変化を捉えたりしながら、子どもの思考が活性化する局面や新たな概念を獲得する過程を具体的に捉える。また、その時の授業者の出場や教材が果たした役割について議論を深め、その成果を、より良い学習指導案および教材の作成につなげる。	
	英語科教材研究	小学校外国語活動において児童の状況に合った活動のあり方を理論的に理解する。児童からの発話を最初から引き出すのではなく、全身反応法（TPR）等を活用し、児童の理解を観察し、徐々に英語で発話する必要性を作り出す教材の在り方を考える。また小学校外国語活動だけの視点に留まらず、中学校との接続を考慮し、小学校外国語活動を英語で実施できるようにする。小学校外国語活動において実際の授業の場面を想定しながら、小学生の状況に応じた適切な教材を作成したり選択したりすることができることを目標とする。	
	体育科教材研究	本授業は「初等体育科指導法」で学修した内容を発展させ、子どもたちの学びを促進するような教材開発を含む教材研究についての基本を学修した上で、実際に指導案を作成し、模擬授業を実施する。模擬授業では指導要領に示された各領域についてバランスよく取り扱い、小学校の体育授業について総合的な理解を深める。模擬授業後の授業検討会やレポートによる意見交換を経て、授業の展開構成についてふり返りを行い、より実践的な指導について学び、授業力を高める。	
	国語科教材演習	必修科目である「国語科概論」「初等国語科指導法」を基盤とし、義務教育段階における教材研究と開発を中心とした演習を行う。文学的文章の表現の細部を読むことや、論理的文章を構造的に読むことや論理的な構成によって書くこと、さらに音声言語教材も含み、それぞれの教材の特色を活かしながら、効果的な学習指導につながる専門・応用的な内容を身に付けることがねらいである。授業は、受講者による研究発表を中心に据え、演習、発表、討論などを行って主体的・協働的に学ぶ。	
	算数科教材演習	小学校算数科目標、内容、指導方法を理解することにねらいを置く。実際に指導計画や指導案を作成し、模擬授業を行う。行った模擬授業に対し指導を行うと共に学生による相互評価を行う。算数科の学びの基本や、その内容や方法を「数と計算」「量と測定」「図形」「数量関係」の4領域で考察していく。児童の主体的な学びを促す指導法のあり方を理解し、教材の内容の分析、指導法の工夫等での優れた実践を参考に指導計画を作成し、模擬授業などを通して授業のあり方を考える。	
教育深化と心理科目群	授業法の基礎	教師にとって、子どもたちが生き生き学ぶ姿を目の当たりにすることは、なにより嬉しいことである。最近、アクティブ・ラーニングが強調されてきているのは、子どもたちが授業に意欲的に参加する状況を作らない限り、豊かな学習は期待できないからである。そのためには、深い教材研究に基づいた授業づくりが欠かせない。教材研究は、いかに教えるかという以前に、教師自身がその教材の価値を再発見することが重要である。対話・討論しながら学習の課題や本質に迫っていくためには、なんでも言える人間的な自由が不可欠である。学習指導案を自ら作成し模擬授業を行うことで、現場教師の苦勞と授業の面白さを体験できるようにする。	
	教育制度研究	1990年代以降今日まで、日本の教育統治システムは明治期の学制導入期、第二次世界大戦後の学制改革期と並ぶ、歴史上三度目の抜本的な学制改革が進んでいる。この新たな教育統治システム（教育ガバナンス）の理念と実際について、特に近年の教育法制度改革を切り口に理解させることを目標としている。 テキストを基に1990年代以降の教育制度改革と地方自治体の教育改革を取り上げ、レポーターによる報告を基に学びあう。	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門応用・発展科目	教育史研究	本科目は、これまでに学修してきた教育の理念、歴史および思想に関する基礎的、基本的な知見を前提として、受講者それぞれの関心に基づいて、地域（松本地域あるいは信州など）の教育的営みに関わる歴史的事柄について幅広く取り上げる。そして、それらの歴史的意義や役割を、現在の教育との連続・不連続という視点から考察し、現在の教育を取り巻く諸問題に関する理解をさらに深めたい。なお、授業は受講者の報告を中心に進めていく。	
	教職教養特別演習	学生自らが主体的にかつ自律的に学修することを求め、大学での学業生活がより豊かなものになることを目指し、かつ将来の夢に備える。これからの教育職員に求められる資質や能力および心構えなどについての認識を深めることをねらいとし、これからの学校教育や教育職員のあり方などについて、具体的な課題を取り上げて理解を深める。小グループでのディスカッションや「熟議」を通して、児童理解や生活指導の実際、学級集団作り、保護者や地域との連携、教員同士の同僚性等学校をめぐる様々な課題に対して、基本的な考えを持ち、対応できる指導力を育てる。	
	特別支援教育入門	（概要）はじめて特別支援教育を学ぶ学生を対象に、特別支援教育の意義と役割、教育の体系と内容について概要を解説する。 （オムニバス方式／全15回） ③ 小島哲也／5回 知的障害を主とする障害児を対象とした教育現場において、教育課程がどう編成され展開して行くのか、具体的な資料によって解説していく。 ④ 小林敏枝／5回 特別支援教育が果たすべき役割、知的障害児の特別支援教育の教育目的、指導の実際、日常生活の指導、指導教科別の指導の実践等。 ⑩ 内藤千尋／5回 特別支援学級や通級による指導の仕組みとその実際、特別支援学校における教育の仕組みとその実際、就学までの支援の仕組みとその実際を講義する。	オムニバス方式
	子どもの学びをつくる	受験ともかかわって、意味のわからないことでも、とにかく練習・習熟して身に付けるといった学習スタイルが多かったのではないかと思います。「学びからの逃走」という状況は、これまでの学校教育の問題点を浮き彫りにしている。これからの教育、学びのあり方を考えるためには、まず自分たちが受けてきた教育のよかった点や改善すべき点をふり返ってみる必要がある。学びは本来、知的好奇心に満ちた感動的なものである。そのような授業では、自然に集中が生まれる。学ぶことで自然や社会や人間が見えてくる。そんな子どもたちの学びは、どうしたら可能になるのか、現場での具体的な実践を基に探っていく。	
	義務教育の未来を考える	本講義では、現在と未来の義務教育を、3つの点から考える。 1つは、実際の小学校と中学校の教育実践録を講義で取り上げ、未来の授業づくりや授業改善の取り組みについて考える。2つ目は、小学校と中学校の教師のライフストーリー・ライフコースの書物を講義で取り上げ、学生が学校現場に出た時の教師の育ちについて考える。 3つ目は、校務分掌や開かれた学校づくりの実践報告を講義で取り上げ、これからの時代の組織としての学校・チーム学校について考える。	
	学校心理学	生徒指導や教育相談および特別支援教育において行われるようになってきた「チーム支援」の理論と方法を学ぶと共に、中心概念である心理教育的援助サービスの視点から、これからのヒューマンサービスとしての学校教育のあり方を理解する。子ども達が幸せになることを教師はどのように支援すべきかについて理解を深める。講義によってヒューマンサービスの視点から学校教育を捉え直し、演習によって困難を抱えた子どもの支援方法の策定を行いながら、具体的な方法を学ぶ。またグループによる事例検討を多く体験しながら理解を深めていく。	
認知心理学	教育心理学の最も重要な基盤である認知心理学について、その基本的な研究手法について演習形式で学ぶ。特に学校教育に関わるテーマについての認知心理学的な研究手法について、国内外の研究論文を読み、その再現を試みる。学生には次のような力を身に付けてもらうことを目標とする。 ・認知心理学の基本的研究手法について理解すること ・基本的手法の内の幾つかについて活用ができるようになること ・教育に関わる事象について認知心理学的な観点から批判分析ができるようになること		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門応用・発展科目 教育実践科目群	臨床心理学(発達障害入門)	臨床心理学の知見に基づき、発達障害に関する基礎的な知識を確実に定着させ、この障害のある児童の特性に応じた教育の方法について理解し、その活用の仕方について学ぶ。発達障害の理解を深めるために、発達心理学の視座からこの障害の特質を正しく認識できるようにする。その上で、発達障害児に対する適切な教育方法のあり方について、理論と実践の観点から読み解く。とくに、発達障害児の教育に有効であるとされる応用行動分析について取り上げる。	
	カウンセリング入門	カウンセリングの基礎的な理論やその実践の方法について修得し、小学校における様々な教育活動にカウンセリングによる手法を活かせるようにする。まず、カウンセリングを担う側の立場にある自己の心理的特性について客観的に理解する。その上で、バーバルコミュニケーションとノンバーバルコミュニケーションの違いを知り、相手の言葉に耳を傾けること、自分の言葉を相手に伝えることについて幅広く学ぶ。そして最後に、学校教育の活動にも応用が効く芸術療法に関して体験的に学び取る。	
	介護等体験入門	本科目は、介護等体験（社会福祉施設5日間および特別支援学校2日間）の事前指導として開講している。したがって、充実した介護等体験を実施するために、介護等体験の意義・目的を理解し、介護等体験を行うにあたって必要な基礎的な知識、技能、態度を身に付けることを目的とする。介護等体験を行う社会福祉施設や特別支援学校の法的根拠や実態、最近の動向等に関する基礎的知識をもって体験に臨めるように進める。	
	地域活動実習	地域教育演習は、地域の小学校等で、教育活動や校務、部活動や放課後指導等の支援や補助を行う体験型の授業である。教員に求められる資質を理解し、自らの教員としての適格性を把握する機会とすると共に、大学で学ぶ理論と小学校現場での実践（体験）とに基づく省察を繰り返すことにより、教員としての実践的指導力の基礎を育成することを目的とする。特に、地域教育演習（地域活動実習）では、目的達成の第一段階として、小学校教諭の多様な職務、役割について体験を通して知ること、児童一人ひとりと丁寧に関わり、児童の理解を深め、信頼関係を築くことを中心におき、現在、教員や学校に求められる資質や役割を考える機会とする。さらに、小学校での体験を省察し、これから教員を目指す自分自身の課題を明確にする。	
	学校インターンシップ	学校インターンシップは、近隣の指定協力校の小学校で、教育活動や校務、クラブ活動や放課後指導などの支援や補助を行う体験型の授業である。教育実習前の授業に入るための準備として、集団指導のための学級経営のあり方や一人一人の児童に適した関わり方の双方を学ぶことを中心に置く。そして、それらの経験を通して、教員としての実践的指導力を身に付け、さらに、これから教育実習に向かう自分自身の課題を明確にする。	
	教育実践特講	長野県下の小学校、中学校、高等学校の授業を、受講者全体で参観し、参観後課題レポートを提出する。そのことによって、授業参観の基本的な見方、心得を学ぶ。続いて、そのレポートに基づいて小グループによりディスカッションを行い、授業に対する基本的な理解・見方を確かなものにし、教師に必要なコミュニケーション能力、自己表現力を学ぶ。また、学習指導案を立て、模擬授業を通して板書の技術を学ぶと共に、自己課題を明確にする。最後により授業・よく分かる授業についての理解を深め、授業の評価について理解する。	
	地域学校教育活動	地域学校教育活動は、教員に求められる資質を理解し、自らの教員としての適格性を把握する機会とすると共に、大学で学ぶ理論と小学校現場での実践（体験）とに基づく省察を繰り返すことにより、教員としての実践的指導力の基礎を育成することを目的とする。 これまでの学内での学修および学外での体験や実習での成果を踏まえ、教諭の指導の下で、小学校教諭の職務、役割、加えて児童（個人や集団）に適した関わり方を経験することを中心に置く。そして、それらの経験を通して、教員相互の関係性や同僚性についても理解し、学級経営力や学校運営力の基礎を身に付ける。さらに、小学校での体験を省察し、これから教員を目指す自分自身の課題を明確にする。	



科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門 応用 ・ 発展 科目	初等教育実習事前・事後指導	初等教育実習をより円滑に、より効果的に行うために、初等教育実習の事前と事後に行う授業である。事前指導では、大学で学んだ理論と教育実習の距離をできるだけ縮め、抵抗なく臨めるように指導し、教育実習に際して求められる必要不可欠な基礎的・基本的な事柄をしっかりと身に付けさせる。また事後指導では、教育実習前の自己の教育観、学校観、子ども観などと対比し、今後の学校教育や教師のあり方、および諸課題を認識することを主なねらいとする。	
	初等教育実習	初等教育実習の意義や心構えを理解し、児童理解の方法や授業計画および教材研究、学級経営などを、指導教官について具体的に学ぶ。現在の小学校や学校教育をめぐる厳しい現状や課題等も把握して、児童に生きる力の育成を目指す教師としての役割や使命感を持って、初等教育に臨む学生を育てる。また、学校教育目標の願いの実現に向けて努力している先生方の小学校生活の1日を理解し、普段からの児童との関わり方はもちろん、給食指導・清掃指導を通して、同僚性を発揮しながら組織として対応している教師の姿からも学ぶ。	
	教職実践演習（初等）	大学4年間で学んだ教職に関する知識や実習成果の整理統合を図り、現場に立つ教員として求められる最低限必要な実践的資質・能力が身に付いているかどうかを各自に点検させ、受講生に現時点での自己の到達点を自覚させると共に、その足りない部分を生涯にわたって補う努力を続けることができる力を身に付けた教員を送り出すために必要な授業内容を提供する。目標として①教員としての使命感や責任感、教育的愛情 ② 社会性および対人関係能力 ③ 児童理解の能力および児童指導能力 ④ 教科の専門的知識および指導力⑤ 学級経営能力、が上げられる。	
	特別支援教育総論	（概要）近年インクルージョン（共生）の理念が世界的に普及し、特別支援教育は重要な教育課題になっている。そのような流れの中で、教師を志す者すべてに対して特別な教育的ニーズを持つ子どもについて正しく理解し、適切な対応ができることが求められている。本講義は、そのような要請に応えるべく、障害のある子どもの教育と発達に関する基礎的知識の習得を目標とする。特別支援教育の歴史と動向、その現状と課題について基礎的知識を習得し理解を深めることを目的に、3つの主要テーマ（特別支援教育とはなにか、子どもの発達と障害、特別支援教育の現状と課題）に沿って講義を行う。 （オムニバス方式/全15回） （6 小島哲也/7回） 特別支援教育の対象となる障害として、脳と中枢神経系の発達、感覚と運動、知的障害、肢体不自由、言語・聴覚障害についての現状と課題を講義する。 （18 内藤千尋/8回） 特別支援教育の歴史と動向、その現状と課題について基礎的知識を習得し理解を深めることを目的に、3つの主要テーマ（特別支援教育とはなにか、子どもの発達と障害、特別支援教育の現状と課題）に沿って講義を行う。さらに、発達障害についても現状と課題を解説する。	オムニバス方式
	知的障害児の心理・生理・病理	（概要）知的障害は脳の器質的あるいは機能的異常によって生じるものであり、その成因は、遺伝要因、環境要因および両者の相互作用に帰せられるものであることを解説する。 （オムニバス方式/全15回） （6 小島哲也/11回） 知的障害の定義、知的障害児の心理特性について、心理学と関連領域の研究知見を解説する。 （61 関ひろみ/4回） 本講義では、知的障害の原因論に関する発達生理および障害発生病理を学ぶことをねらいとする。	オムニバス方式
	肢体不自由児の心理・生理・病理	（概要）肢体不自由児の定義について理解し、特別支援学校（肢体不自由）で多くみられる疾患について学ぶ。 （オムニバス方式/全15回） （8 小林敏枝/11回） 肢体不自由児の心理について発達段階に即した支援について、心理学的側面から理解を深めるために、実践に即した解説を行う。 （62 加藤光朗/4回） 運動障害や姿勢の障害などについて、支援教育を行う上で必要な肢体不自由児の生理・病理について医学的側面から学ぶ。	オムニバス方式

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門応用・発展科目	病弱児の心理・生理・病理	<p>(概要) 病弱児の教育を一言で語ることはできない。なぜなら、疾患ごとに異なる臨床像、治療と関連した流動的な生活環境および教育環境の変化、など、子どもの背景がきわめて多様であるためである。このような病弱児の多様性を理解するための基本的知識を習得し、援助視点を学ぶことをねらいとする。 (オムニバス方式／全15回) (63 宮地弘一郎／8回)</p> <p>病気の子どもの生理・病理・心理・行動特性について学び、子どもたちのセルフケアの実態とその課題を理解する。教育者などの支援者は、彼らの自己管理能力の育成のための知識・技能を習得する必要があることを学び、支援者は、彼らの自己管理能力をどう育てるのかを概説する。 (61 関ひろみ／7回)</p> <p>病気の子どもの生理・病理・心理・行動特性について概説すると共に、子どもたちのセルフケアの実際とその課題を明らかにしていく。また、先端医療の対象となっている児童生徒の中には、死と隣り合わせの生活を送っているような子どももいる。子どもたちの「命」と向き合う中で、教師の存在意義や教育の行き着く先について熟考する。</p>	オムニバス方式
	知的障害児の教育課程と指導法	<p>(概要) 知的障害児の特別支援教育に関わる教育課程編成、個別の指導計画の目的と方法、学校内での作成システム、主要領域における指導内容と指導法について理解を深める。 (オムニバス方式／全15回) (③ 小島哲也／5回)</p> <p>知的障害児の指導について、個別的教育支援計画を中心に、指導法とアセスメント、行動観察・分析法、ことばと言語、コミュニケーションと問題行動およびキャリア教育と就労支援などを中心に解説する。 (⑩ 都築繁幸／10回)</p> <p>まず、特別支援学校の教育課程の基本的な考え方や歴史の変遷を学ぶことで全般的な知識を得る。その上で、知的障害児の教育課程の編成と実施における留意事項を説明し、知的障害児の指導と評価について、生活単元学習、作業学習および教科別に分けて解説を行う。</p>	オムニバス方式
	肢体不自由児の教育課程と指導法	<p>肢体不自由児の教育課程について解説する。肢体不自由児教育の指導法や指導の工夫について理解し、多様な児童生徒の実態に即した個別支援のあり方を学ぶ。</p> <p>肢体不自由児の発達を支える力を身に付け、自立を支える教育について学ぶ。肢体不自由児の個に応じた指導を立案できるようになることを目標として、その日常生活を中心に解説する。また、肢体不自由児は運動機能障害に加え、視覚障害、聴覚障害、知的障害などがある場合も多く、指導内容・方法を考える時には、各障害に関する知識と技能の融合が必要となることを解説する。</p>	
	病弱児の教育課程と指導法	<p>(概要) 元々は慢性疾患の長期入院児を対象としてきた病弱教育だが、現在では超重症児、心身症、また不登校児など障害の二極化、多様化が著しい。子ども一人ひとりによって教育課程および指導法は大きく異なるのみならず、常に新たな対象疾患への教育的対応が求められる。現在病弱教育の対象となっている子どもの教育課程および指導法について学ぶことを通して、子どもの多様性に対応しうるような教育の創造性を養う。 (オムニバス方式／全15回) (63 宮地弘一郎／8回)</p> <p>病弱児についての理解を深めるために、その代表的な疾患である心疾患、呼吸器疾患、心身症などの主な対象疾患や、近年の病弱概念の変化について理解する。また、病弱児教育の現状と課題、多様な対象疾患における障害像を理解し支援するための視点を身につけることで病弱児の教育課程を考える。 (64 渡邊流理也／7回)</p> <p>現在、病弱教育の対象となっている子どもの教育課程および指導法について学ぶことを通して、子どもの多様性に対応しうるような教育の創造性を養う。病弱児のQOL (quality of life) とQOE (quality of education) について理解し、そのための援助視点を身につけることで病弱児の指導法を理解する。</p>	オムニバス方式
視覚障害児教育総論	<p>視覚障害児を対象とした教育課程の特徴、視覚障害の原因、評価方法、視覚障害児の知覚・認知・運動の各領域における心理学的、生理学的特徴、弱視児や盲児の認知・発達特性に応じた指導法について講述する。</p>		

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門応用・発展科目	聴覚障害児教育総論	聴覚障害は、単に聞こえの障害のみならず様々な学習経験や発達上の困難が生じる。補聴器などの装用に対する心理的な抵抗が生じる場合もある。聞こえの障害を多角的に捉えて、他者を深く理解する基盤を培うことができるように、体験や協議を多くした授業とする。	
	発達障害児・者の支援と教育	<p>(概要) 特別支援教育では一人一人の教育的ニーズに応じた適切な支援を行うことが求められる。小学校・中学校の通常の学級や特別支援学級に在籍する発達障害児の教育的支援も同様である。本授業では、重度・重複障害を含めた発達障害児・者を中心に発達期に現れる多様な障害と困難を理解し、その支援に必要な基礎知識の習得を目標とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>③ 小島哲也/4回</p> <p>多様な発達障害児の言語コミュニケーションの発達とその特性、教育的支援における情報通信技術 (ICT) と補助代替コミュニケーション (AAC) の活用方法について解説する。</p> <p>⑤ 羽田行男/6回</p> <p>学習障害、注意欠陥多動性障害、自閉症スペクトラムの定義と診断分類、これらの障害のある児童生徒の早期教育、特別支援教育における支援方法について解説する。</p> <p>⑭ 内藤千尋/3回</p> <p>発達障害児・者の身体症状、教育的支援と福祉的支援の連携、問題行動と触法行為、等の本人・当事者のニーズに応じた支援について講義する。</p> <p>⑯ 宮地弘一郎/2回</p> <p>医療技術の急速な発展により重度・重複障害児への教育的支援のニーズが高まっている。その歴史的背景、発達援助やコミュニケーション支援のあり方について講義する。</p>	オムニバス方式
	障害児臨床支援演習Ⅰ	<p>(概要) 本授業は知的障害児を対象に行われる支援活動のグループワーク (体験とリフレクション) を中心とした演習形式の授業である。学生は、臨床支援演習Ⅱと合わせて今後の特別支援教育に関わる専門的学習や教育実習に向けた課題を見つけることを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>③ 小島哲也/6回</p> <p>本演習の目的とグループワークの方法に関する解説 (第1, 4, 10回)、支援活動プログラムの作成指導 (第5, 11回)、演習活動全体のリフレクションと総括 (第15回) を行う。</p> <p>(兼任補充/9回)</p> <p>特別支援学校 (知的障害) における自立活動とライフステージを通じた特別支援のあり方について解説する (第2, 3, 5回)。また、知的障害児を対象にした放課後学習支援 (第6, 7, 8, 9回) と地域ソーシャルスキル学習支援 (12, 13, 14回) の活動を実際に経験する。</p>	オムニバス方式
	障害児臨床支援演習Ⅱ	<p>(概要) 本授業は肢体不自由児を主な対象とする支援活動のグループワーク (体験とリフレクション) を中心とした演習形式の授業である。学生は、臨床支援演習Ⅰと合わせて今後の特別支援教育に関わる専門的学習や教育実習に向けた課題を見つけることを目標とする。</p> <p>(オムニバス方式/全15回)</p> <p>④ 小林敏枝/10回</p> <p>本演習では、肢体不自由児の運動発達、発達評価とアセスメントについて解説し、体験を通して理解を深める (第1, 4, 8, 11, 12, 15回)。また、地域のNPOやスポーツクラブ等で行われている肢体不自由児者の支援活動を実際に経験する (第9, 10, 13, 14回)。</p> <p>(兼任補充/5回)</p> <p>特別支援学校 (肢体不自由) の自立活動、ライフステージを通じた特別支援のあり方を解説する (第2, 3, 5回)。また、肢体不自由児者を対象に地域の福祉施設で行われている支援活動を実際に経験する (第6, 7回)。</p>	オムニバス方式
	特別支援学校教育実習	<p>大学で履修した特別支援教育に関する知識・技能を基に、実際の学校現場で児童生徒の育成に直接携わることを通して教育の意味や内容、方法を学ぶ。また、その中で教師としてのものの見方、考え方、豊かな心情、専門職としての資質や能力を身に付ける。実習を通して、特別支援学校の教育理念と教育課程、児童生徒の個別ニーズに対応した教育方法について理解を深め、教師の姿勢に学び、自己を振り返り課題を発見するための契機とする。</p>	

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
専門応用・発展科目	教職入門ゼミナール	教職入門ゼミナールは1年次に行われた学生生活へのオリエンテーションに加えて、教育学部の学生として様々な行事に参加したり、4年生における卒業論文製作を目指した研究や学修について学ぶことで、自らがどのような領域での教育に関する学問に興味があるかを検討することが課題である。個々の教員は、それぞれの専門領域から教職についての課題を設定しゼミナールを行う。また、2年次後期から卒業まで開講される専門ゼミナールを選ぶための時間となる。	
	教職研究基礎ゼミナール	これまで学んできた教育全般にわたる基礎学習を基に、2年次後期から卒業論文作成まで、指導教員によって行われる専門ゼミナールの基礎部分である。内容は、教員としての一般的な知識や能力に加えて、独自の教育への理念や理想を持ち、特に興味のある研究領域での論文を学ぶことで、専門と結びついた学習と研究を通して豊かな教員生活を送ることを目的とする。特に、興味ある研究領域での論文については内容のみならず研究方法を学ぶことを通して、論理的思考力や批判的思考力を身に付け、プレゼンテーション能力を身に付けることを目指す。	
	教職研究ゼミナール	教員としての一般的な知識や能力に加えて、独自の教育への理念や理想を持ち、教員生活を送るための専門領域の学習と研究方法を学ぶことで、専門と結びついた学修と研究を始めるゼミナールである。学校や教育現場での現状を知り、学生独自の興味と関心から課題解決に向けた方策について、より深い理解を進めることが内容となる。その目標は①教員としての課題発見能力を身に付け、様々な観察方法や分析方法を理解する、②ゼミナールの中での討論や講読を通して論理的思考力や批判的思考力を身に付ける。③プレゼンテーション能力を身に付けること、である。	
	卒業研究専門ゼミナール(卒業研究含む)	教職研究ゼミナールでの知識や能力を基礎とし、専門と結びついた卒業論文の作成を目指す専門ゼミナールでの学修の集大成である。このゼミナールは、研究のためのデータや資料の収集を含む内容となる。卒業論文の作成過程においては、各指導教員による年間計画、具体的な指導方法、文献収集方法、卒業論文の執筆方法等の指導が含まれる。また、年間を通しての卒業論文作成の過程の中で、構想発表会、中間発表会でのプレゼンテーションの指導および発表も行う。	

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。

# 学校法人松商学園 設置認可等に関する組織の移行表

平成28年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	平成29年度	入学 定員	編入学 定員	収容 定員	変更の事由
松本大学大学院				松本大学大学院				
健康科学研究科				健康科学研究科				
健康科学専攻(M)	6	—	12	健康科学専攻(M)	6	—	12	
計	6	—	12	計	6	—	12	
松本大学				→	松本大学			
総合経営学部 3年次				総合経営学部 3年次				
総合経営学科	80	10	340	総合経営学科	80	<u>5</u>	<u>330</u>	編入学定員変更(△5)
観光ホスピタリティ学科	80	10	340	観光ホスピタリティ学科	80	<u>5</u>	<u>330</u>	編入学定員変更(△5)
人間健康学部 3年次				人間健康学部 3年次				
健康栄養学科	80	5	330	健康栄養学科	80	5	330	
スポーツ健康学科	80	10	340	スポーツ健康学科	80	<u>5</u>	<u>330</u>	編入学定員変更(△5)
				<u>教育学部</u> 3年次				学部の設置(認可申請)
				学校教育学科				
				80 — 320				
計	320	35	1,350	計	<u>400</u>	<u>20</u>	<u>1,640</u>	
松本大学松商短期大学部				松本大学松商短期大学部				
商学科	100	—	200	商学科	100	—	200	
経営情報学科	100	—	200	経営情報学科	100	—	200	
計	200	—	400	計	200	—	400	